とみらいテラス雑感　vol．９

自己啓発（その２）

今回は、「自己啓発」の第２弾になります。

道に迷った私が、それをなんとかするために、「本を読む」ということで、自分に足らない知識や常識をその都度補完して、何とか今日まで過ごしてきました。

まぁ、読んだものの全てが身についている訳でもないし、仮に良いと思った本の通り実践できていたとしても、本と同じようになるとも限りません。言ってしまえば、「良いとこ取り」してきたんだと思っています。

しかしながら、それでも何も取り入れないよりは何倍も良かったと思いますし、これをしなければ、きっと今を受け入れられる状況にはなかったと感じています。

それでは、我が人生において影響を与えた（であろう）書籍をいくつか紹介してみたいと思います。

まずは、櫻井弘先生の『上手な話し方が面白いほど身につく本』ですが、口下手で話をすることが苦手な私は、面白いほど上手な話し方が身についたかは断言できませんが、このような「話し方」の本を時々読んでいました。本を読んだからといって、直ぐに「話し方」が上手くなる訳ではないので、当然のことながら、実践が不可欠です。

まさか初対面の相手に「私の話を聞いてくれませんか？」なんて言える訳がないので、取り合えずお酒を飲むことにしました。当然ひとりで飲みに行くんですけど、カウンターでカッコつけて飲んでいても誰も話してはくれませが、お店の方が気を使って時々話してくれるようにはなります。通い続けて「常連」と呼ばれる領域に達すると、他の「常連」さんとも話ができるようになったりもします。でも、実際には「話す」ことよりも「聞く」ことが多かった気がしなくもないですけど・・・

次は、仕事に活かせそうなものとして、弘兼憲史先生の『なぜか「人の心をつかむ男」の共通点』や『覚悟の法則』といった所謂「ビジネス書」になります。民間企業での勤務経験がない以上、知人から話を聞く以外にその実情を知るには書籍に頼るほかありません。今ではインターネットを駆使することで、より詳しく知ることができるかもしれませんが、要点がまとめられている点や体系的に知るためのツールとしての書籍は、なくてはならないものでした。

あっ、因みに「島耕作」が羨ましいなんて思ってないですよ。

吉林昌寿

とみらいテラス雑感　vol.10

自己啓発（その３）

好評かどうかはわかりませんが、「自己啓発」の第３弾になります。

何はともあれ、何かと残念な私は、書籍を通じて足りない部分を補ってきたのは間違いないようなので、停滞感や壁にぶち当たった時には、「本を読む」ことで何とかしてきた感があります。

前回も「良いとこ取り」だと書きましたが、まぁ、それでも十分だった程度の壁だったのかもしれませんが・・・

これまで「とみらいテラス雑感」を読んで頂いた方々は承知のこととは思いますが、私は考古学を専門として学び、それをもって就職できた訳ですが、当然のことながら、地方自治体の職員としての根本的な知識も資質も備わっていた訳ではなかったことから、この職を全うするための知識は書籍に頼らざるを得ませんでした。

まずは、兼子仁先生の『新　地方自治法』や『自治体・住民の法律入門』などの基本的なものや、増田寛也先生の『地方消滅』、田村秀先生の『自治体崩壊』、山田拓先生の『外国人が熱狂するクールな田舎の作り方』など、様々な自治体が抱えている課題やその解決手法のヒントが記されたものなど、自分自身にとっては新たな問題意識をもって職務に取り組めたと思っています。

これと同じかそれ以上に、職場の諸先輩の指導や多くの研修でも、職務に必要な知識や心構えなどを得られたと思っています。

また、自らのスキル・アップというか問題意識から意図的に学ぼうと思って読んだのが、神谷一博先生の『モレ・ムダ・ミスのない段取りのつけ方仕事のすすめ方』や近藤徹人先生の『現場力を高める人づくり、しごとづくり、ものづくり』、吉田典生先生の『「できる人」で終わる人「伸ばす人」に変わる人』など、私にとっては非常に参考となるものでした。

だからと言って、これでバリバリ仕事ができるようになる訳ではなく、失敗を繰り返しながら、職場の諸先輩の指導や研修の受講などがあって、ようやく一人前に仕事ができるようになったので、本を読んだだけの「知識の鬼」みたいな存在ではダメなんでしょうね。職場でのコミュニケーションがとれなければ、円滑な業務遂行は難しいので、市毛恵子先生の『カウンセラーのコーチング術』や梅森浩一先生の『「はぐらかし」の技術』、中島孝志先生の『巧みな質問ができる人できない人』など対人関係に必要なスキルとして、必要と思ったことがあれば、読んでみて出来そうなことがらを実践してきたつもりです。

吉林昌寿